自転車の存在に気付いて！

５０歳　女性

私の息子は高校３年生です。

息子は、どうしても高校の自転車部に入りたかったようで、自転車部に入るために高校を受験したようなものでした。

念願叶って、希望の高校に合格することが出来ましたが、早いもので、あれからもう３年が経とうとしています。

息子は高校に入ってからは、部活で自転車に乗るだけでなく、自宅から学校までの通学も自転車でしていました。

息子が、通学で自転車に乗り始めてからというもの、私は、毎日のように、「今日も無事に帰って来るだろうか。」と、帰りを待つようになり、息子が交通事故に遭わないかという心配事が増えました。

私自身は、車の運転免許を持っており、正直なところ、息子が自転車に乗り始めるまでは、道路を走っている自転車やバイクに対して、「車の邪魔になるな。」と、思うこともありました。

しかし、いざ自分の息子が自転車で通学を始めるようになると、少し考え方や物の見方が変わってきました。

息子が自転車に乗るようになってからは、「自転車やバイクは、車よりも弱い立場にあるのだ。」「車の運転手の方が気を付けてあげなければいけないのだ。」ということをようやく実感し、それからは、自転車やバイクに対して邪魔だなと思うことは無くなったのです。

そうなると、今度は自分以外のドライバーが、いかに自転車などに対して危険な運転をしているかが気になるようになったのです。

息子の話では、自転車で道路を走っていると、わざと幅寄せのようなことをしてくるドライバーがいたり、追い越しの際に文句を言って走り去って行くドライバーもいるそうです。

私は、このような危険で思いやりのないドライバーの存在にとても心を痛めていたのですが、そんな中、遂に恐れていたことが起こってしまったのです。

息子が通学中に交通事故に遭ったのです。

息子が交通事故に遭った場所は、国道の三差路交差点でした。

息子は、国道を直進中で、相手は脇道から国道へ右折しようとしていた車でした。

交通事故があった交差点は、左右の見通しが良くない交差点で、安全確認不足が交通事故の原因だったそうです。

息子は、この交通事故で骨折などの大怪我をして、高校生活最後のインターハイの練習もろくに出来ない状態となってしまいました。

今まで一生懸命頑張ってきたのに、さぞ悔しかったことでしょう。

もう少し相手のドライバーが安全確認さえきちんとしていれば、今回の交通事故は起こらなかったと悔やまれます。

事故後、息子は怪我のリハビリなどに励み、約３か月後には、ようやく自転車通学が出来るようになりました。

私としては、息子の怪我の回復は喜ばしいことだと感じましたが、また心配事が増えたような気がして、少し複雑な心境でした。

そんな不安な気持ちの中、なんと、再び息子が交通事故に遭ってしまったのです。

まさか、１年で２度も息子が交通事故に遭うとは考えもしなかったので、２度目の事故の連絡を受けた時は本当に驚きました。

２度目の交通事故は、息子が直進中に対向の右折車に衝突されるという交通事故でした。

相手のドライバーは、息子の存在に全く気付いていなかったようです。

しかし、交通事故があった場所は、見とおしも良く、きちんと前を見て安全確認さえしていれば交通事故など起こりそうもない場所でしたので、「何故あんなところで？」という気持ちで一杯でした。

２度目の事故で息子は、前回よりも酷い大怪我をしてしまい、現在も怪我の治療中ですが、完治するまでにはかなりの時間が必要になりそうです。

最近のニュースなどでは、自転車に対する交通違反取締り強化の声も多く出ており、自転車のドライバーも交通ルールなどに対する意識を変えていかなければいけないことも当然あると思います。

しかし、それでも私は、車のドライバーに対して、「自転車の存在に気付いて下さい。」と、言いたいのです。

以前の私がそうだったように、車のドライバーから見れば、自転車やバイクは邪魔な存

在かも知れませんが、今回の息子の交通事故を通じて、私は、安全確認をきちんとして自転車の存在に気付いていれば、息子が交通事故に遭うこともなかったと感じるのです。

もちろん、交通事故を起こしたくて起こす人は、まずいないと思いますが、ひとたび交通事故が起こってしまえば、どうしても弱い立場にある自転車やバイクが大怪我をしてしまいます。

交通事故は、ちょっとした不注意や安全確認不足で起こるのがほとんどだそうですので、車のドライバーの皆さんも、そのわずかな時間の安全確認を怠らないように注意をして欲しいと思います。

息子は、１年に２度も交通事故に遭い、これだけの大怪我をしても、まだ自転車に乗りたいそうです。

これだけ好きなことですから、自転車に乗ることを無理にやめさせる訳にもいきませんが、息子の無事の帰りを待ち続ける母の立場としては、３度目の交通事故だけは絶対に起こらないよう願っています。